

箕面の森アートウォーク 2020

—私見・サイトスペシフィックアート制作に臨んで、
美術家として知っておきたい箕面山の歴史と文化—



箕面の森アートウォーク

MINOH
noMORI
ARTWALK
2020

10/20 (火) ~ 11/3 (火・祝)

※展示日時は会場により異なります。

文／中谷徹

資料収集と取材／中谷雅代

コンテンポラリーアートギャラリー Zone アートディレクター

かたち

美神おわす霊山箕面に顕わる造形
—美の再再発見—

えんのぎょうじや

箕面山は役行者が開いた名だたる霊場である。ここに神や仏が集い、共に鎮まる。今年、森が緋色に染まる時、今を生きる美の強者どもが弁財天や歓喜天に感応し、古今の美の息吹が響き合う。法力、験力、霊力、そして創造力の競演。

2020年の秋、霊山箕面に美のパワースポットが立ち現れる。

【目次】

1. 箕面の森アートウォーク 2020 とは
2. 箕面について
3. 現代から役小角が見た古代の箕面を俯瞰する
 - 3.1 箕面山とその霊力
 - 3.2 箕面山南麓の集落、池ノ内村と隻牛村そしてその支配者たち
 - 3.3 小角、葛城山から三鈷杵を求めて箕面山へ出立
 - 3.4 池ノ内村の人々の生活
 - 3.5 呪術師小角、霊山箕面との邂逅
 - 3.6 集落の人々の宗教、仏教による山岳信仰（神道）の顕在化
 - 3.7 神道と仏教における親和性
 - 3.8 山岳信仰（神道）と仏教（雑密）の習合の始まり
 - 3.9 三鈷杵を求めて箕面山の大滝へ
 - 3.10 修験道に見る今日の日本人の宗教観の芽生え
4. 箕面の森アートウォーク 2020 とサイトスペシフィックアート
 - 4.1 霊山箕面に顕わる造形（かたち）
 - 4.2 「場」としての明治の森箕面国定公園

箕面の森アートウォーク 2020 イメージ
「箕面雌滝と不動」CG 橋本修一
「攝津名所圖會」寛政8年（1796）刊より



1. 箕面の森アートウォーク 2020 とは

「箕面の森アートウォーク」は今回で5回を数える。開始当初(2011年)から、現代美術の表現形態の一つ、サイトスペシフィックを掲げている。この表現形態は、制作過程において「箕面の森」を特定の「場」として考慮する必要がある。アーティストは、その「場」の歴史や文化、地理的、地勢的要素、土地の環境、生活空間など、場所の特性を生かした表現が求められる。

これまで、滝道に沿った旅館や施設、広場などで展示や公演をしてきたが、今年度は「場」を掘り、より一層、箕面の歴史、文化、なかでも「霊山箕面」に触発された、その「場」でしか成立しえない作品を発表できたらと考えている。



箕面の森アートウォーク 2017 より「琴の家」
「Lost」木村 奈央とパフォーマンス「水陰に差す」酒井 エル

2. 箕面について

箕面は年間200万人もの観光客が押し寄せる観光地として、関西では広く知られるところだが、箕面の住人が考えるほど周知されてはいない。まだまだこの地名「箕面」を読めない人もかなりいる。当然、人々の箕面についての知識は「滝」と「猿」と「もみじの天ぷら」くらいだろう。因みに、箕面の名の由来は、役行者が滝の流れがまるで農具の「箕」の表面に似ていると言ったことから「箕の面」、箕面と呼ばれるようになったそうだ。また、中国の「*箕山(きざん)の節操」にちなんで、滝に水のわく水生(みのお)が、地名にあてられたという説もある。

※(許由(きょゆう)が世俗の名利をさけ、箕山に隠退して節操を守ったという「漢書」鮑宣伝の故事から)節操を守って官途につかないことのたとえ。

箕面は、北摂の一面にある人口13万5千人ほどの小さな町だが、人々に知られていない数多くの顔を持つ。例えば、日本最古の弁財天(瀧安寺、658年)や宝くじ発祥の地(瀧安寺、1624年)、日本最初の聖天(大聖歓喜天)出現の霊場(西江寺、658年)、日本で最初のカフェ、ブラジルコーヒーの専門店カフェパウリスタ(1911年)、最初ではないが、今のスパガーデンのところに日本で3番目に古い動物園

(1910年)があり、規模では国内最大だったこと、ミスタードーナツの一号店(1970年)の箕面での出店、箕面の如意谷で日本で6例しかない銅鐸が見つかったこと、最近では、平尾旧坑から未知の鉱物が産出。箕面石(minohlite)として国際鉱物学連合の新鉱物・命名・分類委員会に承認されたことなど、など、日本最古のもの、つまり日本で最初のもので思いの外、この小さな町に沢山あるのをご存知だったろうか。箕面は、進取の気性に富んだ町といえる。いわゆる、イケてる町なのだ。その割に余り世間に知られていないのが悲しい。

箕面を語るうえで忘れてはならないのは、役行者の存在だ。名前は小角(おづぬ)といい、7世紀に現在の金剛山や大和葛城山、熊野、大峰(大峯)の山々で修行をつみ、奈良を中心に活動していた。日本独自の山岳信仰である修験道の開祖として知られている。日本の正史にはほとんど顔を出さないが、唯一「続日本紀」に少し記録が残る。

ほとんどの役行者についての話は、「日本霊異記」などの仏教説話集にあるような荒唐無稽なものが多い。完全な創作ではなく当時流布していた話をもとにしていると考えられる。役行者は、神をも凌ぐ超常的な力を獲得した神仙説的な存在として描かれている。八尺五寸(2m60cm)の体躯で、前鬼、後鬼を従え、神(一言主神)を懲らしめたり、雲(五色の雲)に乗って移動したりと、「ほんにあんたは、神か仏か仙人か、はたまたスーパーマンか」と言いたくなるほど摩訶不思議な活躍をする。今や民衆の信仰の対象にさえなっているのだ。今まで聞いたこともなかったが、演歌にも歌われている。曲は、まさに型にはまったド演歌。役行者を理解する糸口にでもなればと、歌詞を記しておく。

奈良の御所市(ごせし)で産声上げて
役小角(えんのおづぬ)と名付けられ
幼き頃から修行の道を
金剛山や大峰山に
吉野の山で修験(しゅげん)の道の
基礎を固めた 神変大菩薩(じんぺんだいぼさつ)
役行者(えんのぎょうじゃ) 神変(じんべん)さん
(作詞・歌:湊依子)

歌詞に箕面山が一言も出てこないのには、失望した。「金剛山や大峰山に箕面山」と箕面山を付け加えるとしっくりくる。神変大菩薩というのは、没後千年以上の後に1799年(寛政2年)に当時の光格天皇から送られた諡号(しごう)だ。なお、役小角は役行者のことである。(この稿では役小角と表記する)

小角は瀧安寺(箕面寺)や西江寺を開基し、箕面の大滝で修行をつんでいる。修験道の開祖として修験道を箕面に根付かせた功績は大きい。生涯なんども箕面を訪れ、最後を箕面の天上ヶ岳で迎えている。余談だが、もみじの天ぷらとも深いつながりがあるのだ。小角は、今日ある箕

面山の宗教・文化を語るときには、欠かせない人物であるが、それ以上に、今日の日本人の宗教観に大きな影響を与えた人物の一人であることを忘れてはならない。

展示者の「場」の理解を深め、制作の参考になればと、宗教家でも歴史家でもない美術家の私が歴史や宗教について書くのはおこがましいが、以下簡単に箕面山と役小角についての私見を記しておく。

3. 現代から役小角が見た 古代の箕面を俯瞰する

3.1 箕面山とその霊力

平安時代になると、箕面寺（現在の瀧安寺）と西江寺は、勝尾寺と共に聖の住処としてその名が知られるようになる。「梁塵秘抄」にも、

聖の住所はどこどこぞ、箕面よ勝尾よ、播磨なる書写の山
出雲の鱧淵や日の御崎、南は熊野的那智とかや
聖の住所はどこどこどこ、大峯葛城石の槌、箕面よ勝尾よ、
播磨の書写の山、南は熊野的那智新宮

と俗謡にうたわれるほど有名であった。

650年（658年ともいわれる）、役小角は箕面を訪れ、箕面寺を開基し、同年西江寺の前身となる草庵を設けている。爾来、修験道の行場としてつとに知られるようになり、多くの僧が修行のために訪れるようになった。箕面大滝では、役小角はもちろんのこと空海や法然、日蓮、蓮如など名だたる名僧（「日本霊異記」によると役小角は在家仏道修行者とある）が修行している。しかし、霊山で名高い葛城山や熊野、大峯山で修行した役小角がなぜ箕面山にまで修行のために赴いたのだろうか。大峯山といえば標高1915mもある高山だ。金剛山で1125m、葛城山でさえ959mある。箕面山に至っては高々、355m。さほど高くないだろうと思われる二上山でさえ517mある。修験者というもの、好んで

深山幽谷に分け入り急峻な山々で厳しい修行をするという。瀧安寺所蔵の「箕面寺秘密縁起絵巻」では役小角が箕面を訪れた動機を次のように語っている。「葛城金剛の入峯（にゅうぶ）修行（修験者が奈良・大峯山に登り修行すること）をつんで箕面に移ることに及んで、高い山が峙（そばだ）ち五色の雲がたなびくのを見て、これこそわが求める霊験無双の勝地と思い」と。当時の、箕面山は葛城金剛よりも険しく、より高く聳えていたのだろうか。地勢は1400年を経てもそうそう変わるわけではない。

役小角や他の修験者は、箕面山から何か神聖な気配や雰囲気を感じ取っていたのかと、考えたくなる。修行をつんだ者だけが、箕面の自然の威霊を最も敏感に感じ取ることができたのだろうか。一体何をして修験者を箕面に来さしめたのか。件の秘密縁起には、「霊験無双の勝地」と書かれている。箕面山には、他の霊山にはない強い霊力があるに違いない。大阪大学の教授が瀧安寺の奥の院の天上ヶ岳（往生ヶ峰）（役行者が修行した大峯山は、狭義には山上ヶ岳と呼ばれているが、箕面山の天上ヶ岳の呼称と関係があるのだろうか）の磁力を測定すると、異常に強い磁力を検出したそうだ。しかし、磁力と霊力に因果関係があるとは思えないが・・・。ここは、役小角が昇天（701年、享年68）されたとする場所だ。死して、なお霊力を発揮し続けていると考えたくなる。箕面の地に、他に比類ない霊力を見出した役小角は、この地に「霊山」としての歴史・文化の基盤を築いた。

3.2 箕面山南麓の集落、池ノ内村と隻牛村、 そしてその支配者たち

阪急箕面駅に降り立った。箕面山の山腹には、高層ビルや寺社が立ち並び、その裾野では、建物が所狭しとひしめき合っている。正面に鎮座する箕面山を見上げ、役小角が訪れた1400年もの昔の箕面に思いを馳せた。



ハルカスから望む二上山と葛城山

二上山と箕面山の山姿が似て見えるのは偶然か？



大阪モノレールから望む箕面山（柴原駅／旧の能勢街道付近）

駅から徒歩で南東に数分、池ノ内集落(四大字地区に位置する:大字平尾・大字西小路・大字桜・大字牧落からなる)と呼ばれる4~7世紀の弥生遺跡がある(島田竜雄『芦原池と地区の歴史』より)。丁度、ミスタードーナツがある向かい側の一画だ。と言っても都市開発により今はもう、その痕跡すら認めることはできない(実際には、それと隣接するように、町田遺跡と呼ばれるものも見つかっている。殆ど、この地域全域に広がる大規模な集落だったようだ)。

小角が葛城山で五色の雲めがけて投げた三鈷杵(さんこしょ)を求めて最初に、箕面を訪れた西暦650年(白雉元年)、小角17歳の時には(19歳、25歳という説もある。説話によって異なる)、箕面山への登り口に、現在の西江寺(そのころはまだ創建されていなかった)の辺りにわずか7戸ばかりの集落があった。聖武天皇(701年~756年)のころは隻牛村と呼ばれていたそうだが、それ以前の村名は分からない。この村名はおそらく小角が大聖歓喜天によって悉地(しっち)(秘法を修めて成就した悟り)を成就した時の逸話から自然と人々が呼ぶようになったのであろう(ここでは便宜上、それ以前の村名も隻牛村と呼ぶことにする)。村は、後に平尾村となり、1989年に箕面村(現在の箕面市)に併合された。平尾村には、瀧安寺の北の山中に平尾銅山があったが、現在は廃鉱になっている。止々呂美にも、すでに閉山になっているが、鉦山(川浦鉦山)があった。この北摂は、古くは奈良時代から銅の産地として知られており、東大寺大仏鑄造(752年、天平勝宝4年)に際してもこの地区から銅を抛出したという伝説が残されている。小角が箕面を探訪する5年前に中央政府では、大化の改新(645年)が起り、世の中が大きく変貌しようとした時期であった。

ここからは、想像の域を出ないが、箕面山の南麓斜面にある隻牛村(平尾村)の村民は山に生活の基盤を置いていたのだろう。池ノ内村の人々とは違い、山の神に関わる祭祀的な役割を担った人々や箕面の森で狩猟を専業とするマタギ、森の樹木の伐採に従事するキコリ達が住人であったかもわからない。一方、池ノ内村(集落が、7世紀の律令制でどう位置付けられたのか不明なので、ここでは便宜上「村」とする。あえてムラとはしない。)では、稲作を主とする農耕生活を送っている。645年の大化の改新による改新の詔の発布で、当時(650年)は律令制度へ移行の端緒についたばかりであった。公地公民制が敷かれ、この地域を支配する豪族は突然の変革に戸惑っていたはずだ。

四大字地区の中央部に阿比太連一族の氏神を祀る阿比太神社が鎮座している。阿比太連とは弥加利を祖とする物部氏の一族で、この地方の古くからの豪族である。しかし、587年(古墳時代)の丁未(ていび)の乱で出雲系の大連物部守屋は、仏教の礼拝を巡って渡来人の大臣蘇我馬子と対立し、物部氏が滅ぼされている。物部氏の祖とされる弥加利(御狩)連は物部守屋の兄という。中央の物部氏と蘇我氏との政治的、宗教的対立の影響が、この地方にまで及ぶのにさほど時間はかからなかったであろう。崇仏派(仏教)の蘇我馬子が勝利した以上、排仏派(神道)の物部守

屋一族は滅ぼされたはずだ。この乱の後、阿比太連一族のこの地方での支配力は弱まり、代わって渡来人の秦氏の力が増してきたに違いない。池ノ内村の周辺に散見できる古墳は、おそらく、丁未の乱以前は阿比太連一族のものであり、以後は秦氏のものではないだろうか。と言っても、646年の「大化の薄葬令」により、それ以後、墳陵は小型簡素化され、次第に古墳は造営されなくなってしまった。おそらく現存の古墳の多くは阿比太連一族のものであろう。小角が箕面に足を踏み入れた650年は、秦氏がこのあたりの集落を統べていた。ちなみに、そこから南東に行ったところに、服部天神があるが、この神社は秦氏に由来する。

律令制の影響を受けたのは、豪族ばかりではない。池ノ内村の人々は、人々で、新たな税制(租・庸・調)や土地制度(班田収授法)に困惑していたことだろう。山に生活基盤を置く隻牛村の人々の実態を中央政府が、把握するのは難しいが、少なくとも村の人々は、中央政府の変革は耳にしていたはずだ。

この二つの対照的な生活形態を営む村落が共に箕面山の南麓にあり、ほんの数キロの距離を置いて同時期に存立していた。そう考えると、当時の箕面の住民の生活が俄然、鮮明に蘇ってくる。ますます、探究心がそそられ、興味が湧いてくる。

3.3 小角、葛城山から三鈷杵を求めて箕面山へ出立

高い山が峙(そばだ)ち五色の雲がたなびくのを見て、三鈷杵を投げたところ雲とともに飛んでいった。これこそわが求める靈験無双の勝地と思い、孝徳天皇の白雉元年(650年)の春、五色の雲を求めて箕面の坂本に来て一人の老翁に行き逢った。(箕面寺秘密縁起絵巻)

*三鈷杵…密教では、杵(きね)の形をした中央の握り両端に鈷の突起をつくりその鋭さによって煩惱を打ち破り、菩提心(仏性)をあらわすための法具である。



天井ヶ岳山頂の役行者像

小角は幾度となく箕面山を訪れている。最初に訪れた17歳の時(650年)(説話により諸説ある)には、すでに元興寺で孔雀明王の秘法を受けている。人々を救済できる験力を会得してこの箕面に旅立ったのだ。吉野と熊野を結ぶ大峯山を縦走する大峯奥駈修行をつんだ小角にとって葛城山から箕面山までの、約70キロメートルは徒歩で1日あれば十分到達できる距離であった。箕面山への行路は、水路なら大和川を下り難波宮に出るか、陸路なら、葛城山から二上山を縦走し、当麻道(日本で初めての官道竹内街道)を抜け難波大道を経て難波宮(難波長柄豊碕宮は、大化の改新後計画され652年完成。おそらくこの時は建設中)へ。難波宮は上町台地にあり、この頃の地形は今とは異なり河内はまだ湖(河内湖)であった。

あるいは、太子道を経て大和川沿いに難波宮に至る経路がある。そこからは、淀川(堀江・長柄・中河・三国川)を渡船を利用して渡ったか、あるいは泳いで渡ったか、小角ならこれらの川を泳ぎ切る力はある。対岸の垂水から箕面街道へ抜け、箕面山へ至った。もう一つの可能性は、能勢街道だ。しかし、能勢街道が飛鳥時代に整備されていたかは不明。憶測の域を出ないが、整備されていなくとも、人々は、中津から能勢まで、荷の運搬や物見遊山に細切れの産業道路や生活道路を利用して能勢までを往来していた可能性が大きい。難波宮から中津に抜け、服部で箕面街道に入るか瀬川から入り、箕面山に至る。小角がこれらの行路のいずれかを利用し箕面に足を踏み入れたのは間違いない。

そもそも、小角が箕面に向かったのは、葛城山で北のほうに高く聳え、五色の雲がたなびく山を見て、(山腹に白く輝く光を見て)これぞ「靈験並びのない勝地」と思い、見失わないようにと投げた三鈷杵が瑞雲に消えたので、それを捜すためだ。北方に冷気が立ち上る山の方角に一途に、向かうと箕面にたどり着いたのである。「冷気が立ち上っている」のは水蒸気が、朝の冷気で冷やされ霧となって山頂辺りに立ち上っていたのだろう。おそらく、3月か4月の少し肌寒い季節だ。春とはいえ、この距離を一日で走破したら、いくら超人の小角でも池ノ内村の広大な集落が目に入った時は、安堵したに違いない。早朝、出立したが、もうすでに

辺りは、夕闇に包まれ、集落や箕面山の山並みは背後の薄墨色の空に沈みかけていた。小角は宿を求め集落に足を踏み入れた。

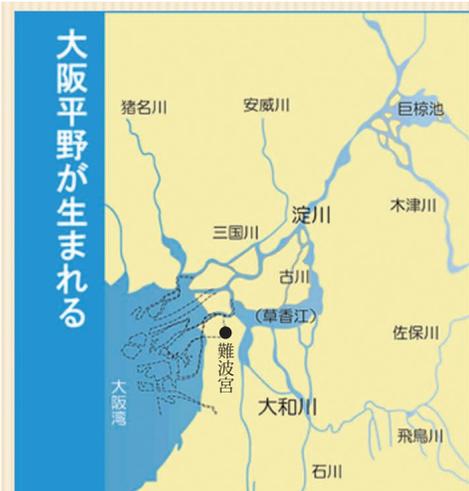
3.4 池ノ内村の人々の生活

小角が池ノ内村を訪れた時は、古墳時代から、飛鳥時代に移行して、中国(隋・唐)や朝鮮半島(高句麗・百濟・新羅)との交流の中で中央政府は律令制度、仏教、儒教、建築技術などを導入した、そんな時代だ。推古(すいこ)天皇は、三宝興隆の詔を發布し、聖徳太子は「十七条の憲法」を制定した。その中で仏教を儒教と並んで政治の基本精神に据えた。また豪族はそれぞれの氏族の祖先を祀る氏寺を建てた。このように従来の祖先崇拜の延長として仏教が信仰されるようになった。新しい建築技術の導入と共に、屋根は瓦や茅、草葺きで、掘立柱建物や礎石建物の寺院や神社が数多く建造され始めた。世界最古の木造建築といわれる斑鳩の法隆寺(607年、推古15年)もその一つだ。貴族社会では、身分の高い人々は板葺きや草葺きの掘立柱住居に住み、絹の衣服を身につけていた。男性の衣服は冠(かんむり)の色に準じて階級が決められている。ロングコートのような上着の「袍(ほう)」を着て、腰の部分を紐で結ぶ。その下にプリーツが入ったスカートのような、どう見ても機能的でない、ただ単に装飾的な「褶(ひらみ)」を着ける。下にラップズボンのような「袴」を穿いた。女官たちは、ゆったりとした道行のような上着の下に結構派手なストライプ柄のスカートのような「裳(も)」を穿いた。端的に言えば、衣装は唐の貴人とほとんど変わらないものであった。

一方、この村の人々は、弥生時代から相も変わらず竪穴に屋根を被せただけの家屋、つまり竪穴式住居に住んでいる。この広大な池ノ内村地域の田を耕作するには大勢の働き手が必要なので、村民は集団で何事も協力して作業を行っている。それぞれの家族の住居もおそらく、村民全員で協

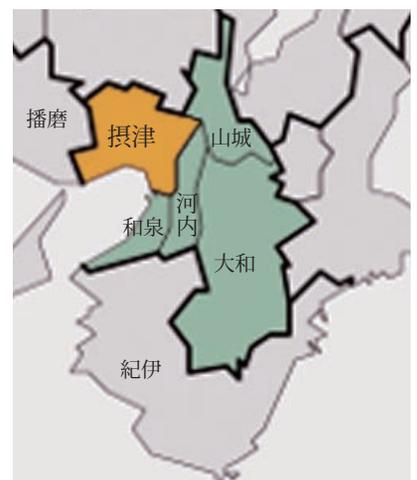


1600 ~ 1800 年前の大阪



【出典】大阪ブランド資源報告書

律令制に基づく行政区分



5世紀以降
仁徳期の治水事業により、河内湖の水域が減少するとともに、流入している大和川枝川等が河口に三角州をつくります。そして湿地・草原あるいは堤防敷となり、その後、河内低地の陸地化が始まります。

浪速宮当時の貴族
大阪歴史博物館



力して建てたのであろう。箕面の森から調達した栗やクヌギなどの材木で垂木や梁を組み建て樹皮や茅、草などで屋根を葺いた。

村の中で、ひときわ大きな建物が目を引くが、この建物は穀物を須恵器などの大甕に蓄え保存するための高床倉庫である。また、村の中央には、祭祀的な性格を備えた高い柱を持つ物見櫓のような建物が据えられている。ここでは、春に田の神を山から迎え、秋に再び山へ送るという豊穰を願う祭事が行われていた。また日照りの時には、水分神(みくまりの神)や箕面の滝の龍神に祈りを捧げる場所でもあった。一般家屋の中でひときわ大きい建物が首長の館だ。これは推測でしかないが、おそらくこの集落は、古墳時代の4世紀から7世紀に数世代にわたり、少なくとも100軒(棟)に達しようかとする大集落であったろう。

村の中を往来する村民の衣服とは言えば、大人も子供も皆一様に白色の貫頭衣か白色の布をただ体に巻き付けるように纏い、腰紐を結んでいるだけだ。なかには、わずかだが茶やグレーの衣服を身に着けた村民もいる。しかし、その生地は、絹ではなく麻や楮(こうぞ)などの目の粗い肌触りの悪いものだ。農作業に適した衣服といえるが、貴族の衣服と比較するとあまりにも格差がありすぎる。

小角は、この村落の全容を隈なく観察し、安心したのか首長に面会を請うた。葛城山から箕面に辿り着いたばかりの小角の身なりはあからさまに修行僧のものであった。頭巾を被り、手には錫杖(しゃくじょう)と呼ばれる金属製の杖を持つ。袈裟と、篠懸(すずかけ)という麻の法衣を身に纏う。17歳だが、一通りの山岳修行をつんできた小角には、僧としての風格が見て取れた。(幼いころより仏教を学び、葛城山や吉野、熊野で山岳修行をつみ、元興寺で孔雀明王の呪の秘法を受けている。)説話などによると、「小角は、特異な風貌で、怪異で凄味があり、膝下まで覆う袈裟を着け高下駄をはいている」と描写しているが、17歳の小角にはそこまでの凄みはなかった。そこが幸いしたのか、首長から宿を提供してもらえる事ができた。

早朝、小角が目にしたのは、現在の4大字に広がる広大な稲田であった。箕面川の水で灌漑設備も十分に整備されていた。池ノ内村は、この地域で唯一稲作に従事していた集落である。このあたりの土壌は、保水力が弱く、砂礫地で地味が悪く、しかも、上流部であるために水量が少ない。そのため稲作に適していない。収穫量は、地力に依存する割合が60%前後といわれる。当時の人々も、経験則に基づき、土壌改良に心血を注いだに違いない。(箕面では縄文遺跡が多く残っているが、弥生遺跡はここだけである。)箕面川は、この地域の人々にとって、恵みの川であるが、反面、古代から1983年に治水ダムができるまで、川の氾濫に悩まされ続けてきた。古代から人々にとって川の水は恵みをもたらす一方、災害をも、もたらす悩ましいものであった。したがって、この稲田から十分な収穫は得られるはずがないので、池ノ内村の人々の生活は楽ではなかった。人々は、縄文時代から箕面の森で栗や椎の実などの木の実を収集したり、イノシシやシカ、鳥などを捕獲したりして食料としていた。稲作を始めても、いまだ人々は、箕面山からの恩恵を享受していたに違いない。

3.5 呪術師小角、霊山箕面との邂逅

小角はこの集落に足を踏み入れたときから葛城の集落の人々と同じにおいを感じ取っていた。小角が育ったのは大和葛城山の山麓にある御所(ごせ)市である。葛城山は、北側の二上山と南側の金剛山と共に金剛山地のひとつだ。標高959mもある高山だが、箕面山は355m。山というより丘陵である。しかしその山貌は丘陵のそれではない。鬱蒼と茂った木々を纏った山の頂から箕面川が山を割き、蛇行しながら麓まで走っている。急流が岩を噛み、飛沫をあげる。川辺から大木の幹や枝葉が溪流に覆いかぶさり、倒木が流れの行く手を阻んでいる。様相は、まさに修験者が求める深山幽谷を想起させるものがある。さらに箕面川に沿って奥深く踏み入ると、山頂辺りに、落差33メートルの箕面大滝(雌滝)に遭遇する。この滝の他に、さらにその奥に二瀑ある。雄滝と瓔珞(ようらく)の滝だ。霊場として名高い葛城山にも金剛山にも滝がある。葛城山には二瀑あり、櫛羅(くじら)の滝と行者の滝だ。金剛山には丸滝がある。さらに言えば、葛城山と金剛山の狭間に、祈りの滝がある。



その山貌は正に修験道の行者が求めているものである。幼いころから、葛城山や金剛山の山岳地帯を跋渉した小角が、箕面山の大滝を練行の格好の道場と考えたことは想像に難くない。

小角は、箕面山の尋常でない山容とそこに鎮座する山の神々を、持って生まれた霊力と修行で得た験力で感知し、滝行では弁財天や竜樹菩薩を、そして光の中から大聖歓喜天を感得した。小角の父は、葛城山神の神託を朝廷に奏状する代々の呪術師であった。小角もまた、呪術師の血を引き祈祷や神占、呪術を施すことができた。小角の超人ぶりが説話にも描かれている。「孔雀明王の呪法を自由に操り、呪術に優れ、もって生まれた不思議な力を駆使して空を、野山を駆けめぐり、鬼神を自在にあやつた人」とされている。卑弥呼が女性のシャーマンの代表なら役小角は男性のシャーマンの代表と言える。

3.6 集落の人々の宗教、仏教による山岳信仰（神道）の顕在化

古来日本では巨石や巨木、太陽、川、山に精霊が宿るとする自然崇拝の考え方があった。古墳時代から続く池ノ内村の人々の間にも、すでに山に神を見出す日本古来の山岳信仰が浸透し、朝目覚め夜床につくまで、毎日箕面山を拝み、崇める生活を送っていた。

箕面山は池ノ内村の人々にとって、神が鎮座する神聖な山として信仰の対象であった。人が亡くなると、その靈魂は箕面山に上り、やがて祖霊となり、山の神になると考えられた。農耕を営む村人たちの間には、山の神が春の稲作開始時期になると村や里へ下りてきて田の神となり、田仕事に従事する村人の作業を助け、稲の成長を見守り豊作をもたらす、と信じられていた。箕面山は、祈りと畏れの対象であった。

594年（推古2年）に中央政府の仏教興隆の詔が下されたのを受けて、多くの大寺院が建立され始めていた。池ノ内村の人々も7世紀（650年）にもなると、支配者で百済からの渡来人である秦氏の影響下で、仏教の教えが次第に広まってくるのを肌で感じていた。

古来より、無意識に人々の間で共有されていた日常の社会規範（価値観や倫理観、道徳観）や生活習慣を、仏教を知ることによって宗教として対象化し始めていた。古代の日本人には、宗教という概念も言葉もなかったのだ。因みに、「神道」という言葉は、仏教の伝来した直後の用明天皇（聖徳太子の父）の時代に初めて書物に現われている。縄文時代から人々によって信仰されていたにも拘らずだ。仏教の出現によりこれまでの超自然的な存在に対する畏怖、畏敬の心が「神道」として顕在化した。

仏教は日本に伝来当初、蕃神（ばんしん）つまり、外来の神と呼ばれていた。神と仏を同格のものと捉えていた節

がある。豪族の間では、仏教派の蘇我氏と神道派物部氏が争い丁未の乱（ていびのらん）が起きたが、これは政争の局面が大きい。なぜか民衆の間では、西洋の十字軍や30年戦争のような宗教戦争は起こらず、神道（山岳信仰）と仏教は共存していた。

3.7 神道と仏教における親和性

神道には、創立者（教祖）はいない。組織的な教団もない。建物もない。教義、経典もない。強いて言えば記紀が教義、経典に近いものだった。さらに言えば、神道においては死者の魂はその家の守護神になると考えられているが、仏教においては、六道輪廻、つまりこの世に生きるすべてのものは、六道（地獄・餓鬼・畜生・阿修羅・人間・天）の世界に生と死を何度も繰り返して、さまよい続けるということらしい。全く異なった死生観である。

このように体系化された教義や制度がある仏教とは、一見相いれないようであるが類似点もある。本来、神道にも仏教にも厳密な意味で「偶像崇拜」という言葉は当てはまらない。例えば、箕面山を依代として選び、降臨し臨在されている神が、山の神だ。池ノ内村の人々は、神を目では認識できない存在として捉えている。その目に見えない存在、「神」を畏怖し畏敬しているのだ。山は神が降臨した物、つまりご神体であって神そのものではない。人々は、そこに宿る目に見えない存在を神として、祈りの対象としている。

一方、仏教には、神という存在はない。仏は神ではない。仏というのは仏陀のことで、「目覚めた人（悟りを開いた人）」のことを指す。両者の最大の違いを挙げるとすると、「人は神にはなれないが、仏にはなれる」ということだ。つまり、仏とは修行を積んで悟りの境地に達した人間ということになる。では、仏教は神道と全く相いれないものであるかと言えばそうでもない。本来仏教には神道同様、偶像崇拜はなかった。仏教の歴史の最初から仏像があったと考えられがちだが、釈迦の死後数百年経っても仏像を見ることはなかつ



役行者 歓喜天 出現對談石（西江寺）

た。自分以外のもの（他力）に身を任せることによって救われるという考え、即ち、偶像を崇拜することは許されなかったからだ。最初は釈迦を表現する代わりに、足跡や菩提樹、卒塔婆などの象徴的な事物で釈迦を暗示していた。世界初の仏像は、紀元1世紀ころインドでつくられた釈迦の姿を模した釈迦如来像だ。釈迦本人は、自身が信仰対象であるとは考えていなかったから。初期仏教においては神道同様偶像崇拜はなかった。

もう一つの類似点と言えば異教に対する寛容性である。西洋の多くの神（イスラム教、キリスト教、ユダヤ教など）は、唯一絶対の存在とみなされ、その神のみを信仰する。ある意味、排他的ですらある。神道では、自然万物のあらゆるものや現象に、それぞれ役割を持った神々が宿ると考えられた。挙句は人間も神として祀っている。例えば、菅原道真を神格化した天満大自在天神や徳川家康の東照大権現はよく知られている。

神道では、八百万の神としてあらゆる神を祀り、異教に対して寛大である。仏教伝来当初、仏を蕃神（外来の神、つまり、外から入り込んできた後に定着し、その国、その土地で既に信仰の対象とされるようになってきている神を指す）と呼び、否定、排斥せず、神道の神と併存させていた。異なる宗教に対して寛容なのである。

同じように、大乘仏教においても異教に寛容なのである。多くのバラモン教（ヒンズー教）の神々が仏と同格ではないが、仏教の守護神として信仰の対象として祀られている。これらの神々は、仏陀の威光に服し人々を守護することを誓い仏教に取り入れられたようだ。大乘仏教の「仏」は、その由来や性格に応じ、「如来部」「菩薩部」「明王部」「天部」の4つのグループに分けている。仏教が日本に伝わった時には、バラモン教の神々は、すでに天部に組み込まれ、信仰の対象になっていた。仏界の仏である如来像や菩薩像が卓越さや威厳をあらわすのに対して、天部の像は衆生と同様未だ悟りに達していないが故の苦しみや悩みを表わして



聖天展望台から望む瀧安寺と天井ヶ岳

いる。要は、仏が神を救ってやろうというわけだ。上部のバラモン教の神と習合させられ、神道の神も上部に組み込まれた。例えば、神道の神の大国主命（オオクニヌシノミコト）は仏教の神様の天部である大黒天（ヒンズー教のシヴァ神の異名）が習合した神様である。このように、神道ほどではないが、仏教にも異なる宗教に対する寛容性はある。

大乘仏教も神道も偶像崇拜をことさら忌み嫌うこともない。異教に対しても寛容性があり排斥したり偶像を破壊したりすることもない。さらに、両宗教が現世利益（げんぜりやく）を目的とした宗教であったのが、仏教が抵抗なく受容された理由なのであろう。宗教の変容を容易に受け入れる日本人の宗教観が、神仏習合を促し、後の本地垂迹説を生み出す要因であった。神道と仏教は全く異なる宗教だが、ある意味、親和性があったと言える。今日、我々の生活に見るように、この頃から神道が「生」、仏教が「死」とそれぞれの役割分担を明確にして宗教の棲み分けをするようになった。

3.8 山岳信仰（神道）と仏教（雑密）の習合の始まり

小角が池ノ内村を訪れたのは仏教と神道が習合の兆しを見せ始めていた頃であった。

小角は7歳にして、叔父の願行（四天王寺で韓国くからくに）の僧から仏教を学ぶから仏教を教わり奥義を極め、17歳（650年）の時には、元興寺で高句麗から来朝した慧灌（えかん）僧上から孔雀明王経（孔雀明王：毒蛇を食べる孔雀の神格神）を学んだ。この教典は雑密（初期密教）の代表的なものであり、また「明王」と言うのも密教の尊格である。日本で密教が公の場において初めて紹介されたのは、805年、唐から帰国した伝教大師最澄によるものであった（純密）。しかし、小角が仏教を学んだ頃、すでに大乘仏教と共にその秘密教として、雑密は伝わっていたと言える。雑密は、大乘仏教と違い、真理は言葉で伝えることはできないが、修行によってこそ真理をきわめることができる、と考える。

中国においては、3世紀前半、初期の密教経典（雑密）が翻訳され紹介されていた。それを信仰し布教したのは主に中央アジア出身の僧たちであった。信者の多くは、遊牧民で、呪文でもって、超自然的な力を発揮し、世界を支配できると考えるシャーマニズムの信奉者が多くいた。難解な教義を説く経典よりも、むしろ呪術的要素をもつ経典が歓迎されたのだ。7世紀までには、同じ遊牧民である朝鮮半島の民衆の間でも信仰され始めていたと考えるのが自然だろう。なお、正式には635年に新羅の僧、明朗大師が唐より雑密を朝鮮半島に伝えている。日本には、遅くとも小角が仏教を学び始めた頃（小角7歳、640年）には、雑密が伝わっていても不思議でない。

日本書紀には、信憑性はさておいて任那日本府（5世紀）の記述がある。また、5世紀初めに建てられた高句麗の広開土王の碑には、「新羅や百済はかつて高句麗の属国であり朝貢していたが、辛卯の年（391年）よりこの方、日本が海を渡り来て、百済、〇〇、新羅を破って日本の臣民にしてしまった」と記されている。広開土王の碑は民族感情も伴って、諸説紛々として何が真実か明らかでないが、この資料からも4世紀から6世紀の朝鮮半島との往来が頻繁にあったことだけは確かだ。

紀元前1世紀から紀元後7世紀の朝鮮半島および満州では、高句麗、百済、新羅の三国が鼎立していた。新羅は、660年に百済を、668年に高句麗を滅ぼした。これによって三国時代は終わり、統一新羅の時代がはじまった。滅ぼされた百済と高句麗の王族は日本にのがれた。この時代に、半島を中心とする地域から、さらに中国揚子江地域からの多数の帰化人が、大陸の文化を携えて渡来し、大陸の情報や先進技術とともに仏教や儒教、道教、陰陽五行説などを日本にもたらした。

日本書紀によれば、「慧灌僧上（えかん そうじょう）は、625年（推古33年）高句麗王の授けにより来日し、三論宗を伝え、勅命により元興寺に住した」とある。小角の師、慧灌僧上を語るうえで、その師、僧吉蔵（きちぞう）の仕事を見なければならぬ。中国隋末に吉蔵は、龍樹（インドの最大の仏教学者）とその弟子によって創始された三論宗を完成させている。龍樹は、大乘仏教（中観）の祖とも密教の祖ともいわれている。時代的に両宗教を同時に体系づけることは無理があると考えられ、古龍樹（大乘仏教完成）と新龍樹（密教を完成）の二人説なるものもある。何はともあれ、このことから小角は、慧灌から雑密を学んでいた可能性が高い。説話によれば、小角17歳（650年）で慧灌僧上から元興寺で孔雀明王経を学んでいる。慧灌僧上は25年も元興寺にいたのだろうか、と疑問がわくが……。その後、河内国に井上寺（いかみじ）を建立し、三論宗を広めたと記録にある。それが事実とすれば、小角はこの名僧から、山岳信仰（神道）のほか、大乘仏教や雑密、道教、陰陽五行説などを学んでいたであろう。

池ノ内村を訪れた頃の小角（17歳）はすでに雑密や道教、山岳信仰（神道）を未完成ながら習合させ、修験道を形成しようとしていた。村民たちの間でも、中央政府による仏教の布教活動によって、村民の生活の中に溶け込んだ伝統的な社会規範や価値観、習慣が宗教として立ち現われてくると、新しい「神（蕃神）」への接し方に戸惑い、心の拠り所を失い、安寧を求めて村人の心の中で無意識に習合が始まっていた。

村に滞在中、小角が、葛城山や金剛山での修行を通じて体得した教えを説くと、新しい心の在り方や拠り所を模索していた村人は、この若い修行僧にたちまち心酔し、小角の言葉に耳を傾けていた。今まで、何か事あれば、無条

件に頼れる存在であった田や山の神々に加え、村民たちの心に、新しく「仏」が加わっていった。

3.9 三鈷杵を求めて箕面山の大滝へ

白雉元年、小角17歳（650年）。小角は、葛城山から高く聳える山にたなびく五色の雲をめがけて三鈷杵を投げた。「そこが、『靈験並びない勝地』であるなら、留まって祈念し、さらなる修行をつもう」と、決意し霊気が立ち上る北方の山に三鈷杵を求めて旅立った。夕刻、箕面山の麓の池ノ内村に行き着く。そこで、小角は、首長や村人から思わぬ歓待を受ける。葛城山や金剛山で修行を積んだ小角の言葉が人々の琴線に触れたのであろう。おそらく山や、山を背に生活をする者が抱く共通する山への感謝や畏敬の念が、お互いの心に通じ合ったのではなかろうか。山は神霊の住む霊地で信仰の対象なのだ。小角は、村で一夜を過ごし、はやる気持ちを抑えるように、早朝、山へ向かった。

池ノ内村から小角の足で、十分足らずで箕面山の登り口にある坂本（現在の西江寺から一の橋辺り）に行きついた。そこで、箕面山の領主と名乗る老翁に遭遇することになる。この老翁は、一目で小角を山岳修行者と見て取り、待ち構えていたように、「私も貴方と共に早くこの地に伽藍を建立したいものだと思っています。ここは本当に靈験が並びない勝地です。中国で今、密教の法理が東に伝わろうとしています。その密教に相応する霊場なのです」と言い終わると、たちまち消えてしまったそう。老翁から山の奥深いところに滝があり、その東の峰に鬱蒼と茂る松林がある。その中の一本の松の木が赤々と光を放っていると聞き、求めていた物に違いないと、先走る気持ちを抑え、教えられた通りに滝を目指し、溪流に沿って山を登り始めた。

昼でも暗く、木々の枝葉が幾重にも覆いかぶさるように行く手を遮る。獣道と思しき道を、溪流に沿って遡上した。大峯奥駈修行をつんだ小角は、岩石が露出する山道を、何のためらいもなく素早く歩を進めた。眼前を鳥が礫のように黒い影を残して飛び去った。木々の合間から抜け落ちて来る光は、歩調に合わせて膝に照らし出されては消える。溪流の流れに逆らうように頂上を目指した。時には巨岩に行く手を遮られたり、猿やシカの出現に意表を突かれたりしながら、しばらく山道を歩き続けた。冷気が頬のあたりを掠め、足元がぬかるんでくると、遠くのほうで低く、小さく、唸り音が微かな地響きを伴って、空気を震わせていた。途上の峻険で鬱然とした様相にもかかわらずひとしきり歩くと、行く手が大きく広がり、遠くに小さく滝の存在が確認出来た。

眼前の見上げるばかりの滝に、小角は、畏怖の念で打ち震えていた。まるで天が決壊し空から轟音を伴って水が一気に流れ落ちているようだ。近づくと水が砕け散り、水飛沫が高く舞い上がった。滝壺の辺りは、飛沫で白く煙っている。老翁の言葉に従い、この滝の頂に登り、龍の住むと

いう御壺を見出した。さらに、その東の峰の松林の中で、松の枝に葛城山から投げた三鈷杵が霊光を放っているのが目に入った。その瞬間、小角は喜びのあまり涙を止めることができなかった。ここに霊神が現れるに違いないと確信し、祠を建てて三鈷杵を納めた。心なしか安堵し、御壺の中で千日修行に入った。ちなみに、三鈷杵が引っかかっていた松は、「三鈷の松」と言い、今も峰にあるそうだ。

その後、千日修行に入った小角は、滝の石の上で何日も秘呪を唱え苦しい修行をつんだ末、弁財天の導きを受けて真理を悟ったという。報恩感謝のもとに、自ら弁財天の像を作製し、滝の側に祭祀して箕面寺（瀧安寺）を開基した。その経緯は、「箕面寺秘密縁起絵巻」に詳細に興味深く語られている。

滝のそばに小庵を営み、そこに籠って悉地成就の大願を満たそうと、数年修行を続けが、一向に悟りを得ることができなかった。滝での修行の甲斐もなく、冬の寒さの中、金剛山に帰ろうとしたそのとき、突然地鳴りがし、大光明が輝き、光の中から大聖歡喜天が現れた。歡喜天の教えに従って、龍樹菩薩の浄土に行くことが出来たと言う。その後、小角は、坂本の辺りに西江寺を開基した。その経緯は、「西江寺略縁起」に最も詳しく、かつ面白く描かれている。（飯島正明『箕面の説話・道教と北摂』より）

役小角は701年、箕面山の天上ヶ岳（往生ヶ峰）で昇天（享年68）されたそうだ。

3.10 修験道に見る今日の日本人の宗教観の芽生え

小角は、今日の日本人の宗教観を形成した人物の一人である。

「あなたが信じている宗教は何ですか」と問われれば日本人の殆どの人は、「自分は無神論者だ」とか「仏教徒だ」と答えるだろう。おそらく、世界的には、日本は仏教国というイメージを持たれている。しかし、歴史的に見れば、縄文時代から現代に至るまで日本人の間で通底している宗教観は、たとえどのような宗教を信じていても、自然への感謝や畏怖、畏敬の念から生じる、自然に宿る神への「信仰」心だろう。しかし、多くの日本人はこうした心のあり様を「宗教」として捉えていない。

古代日本では、神が山岳や樹木、岩石などの依代に降臨し臨在していると信じて、その依代を祈りの対象としていた。したがって、人々は多種多様な神々、つまり「八百万の神」を崇め信仰していた。現代では、この心のあり様は、自然崇拝や山岳信仰、神道（古神道）と呼ばれている。日本人の生活様式や日常の価値観はこの「信仰」に大きく影響を受けている。

小角は、葛城山や金剛山での練行を通じて日本古来の

山岳信仰を実践し、叔父の願行や元興寺の慧灌僧上から外来の道教、つまり神仙思想や陰陽五行説、そして仏教、とりわけその中の雑密を学んでいた。小角は、17歳にして葛城山や金剛山をはじめ、もちろん箕面山も、霊山と言われる霊山を隈なく遍歴した。その足跡は（信憑性はさて置き）近畿一帯に限らず北は羽黒、月山、湯殿の三山、南は彦山、阿蘇、霧島、高千穂に及んだ。修行場としての山々には、役小角を開基とする山岳寺院が建立されている。41歳の頃、「大峯奥駆千日修行」の末に吉野の心臓ともいえる金峯山の山上ヶ岳で修験道の本尊である金剛蔵王大権現を感得している。釈迦如来・千手観世音菩薩・弥勒菩薩の権現で、輪廻転生を繰り返す我々の過去・現在・未来の魂を守護しているそうだ。これは、インドに起源を持たない日本独自の仏である。自然の霊威を体現しているとされ、日本各地の霊山に祀られている。

こうした開山、開基を通じて、主に雑密と山岳信仰（神道）を習合させ次第に日本独自の山岳宗教である修験道の一つの宗教体系として確立させた。この神仏習合は、奈良、平安時代以降、脈々と続く日本人の信仰の主流となっている。

現在においては、誕生祝い・七五三・成人式や祈願事などのハレの行事は神道が、葬儀・供養や死生観にまつわることなどのケガレは仏教が担うように機能を分担されている。我々日本人の文化では、これらの儀礼は、宗教儀礼として捉えられていない。慣習やしきたりのひとつとして受け取られている。これは、小角の創造した山岳宗教、修験道に端を発しているといえる。小角は今日の日本人の宗教観を形作った。



4. 箕面の森アートウォーク 2020 と サイトスペシフィックアート

4.1 霊山箕面に顕わる^{かたち}造形

この秋、1400年の時空を超え、箕面の森アートウォーク2020の芸術家が、修験道の霊場である箕面山の自然の霊威に直接且つ最も深刻に感じる創造の「場」を見出し、深く自然と役小角の験力に繋がり、まだ見ぬ形を涉猟する。そこに、仏や神々の霊力と芸術家の靈感（インスピレーション）

との交感が生まれる。

創造にたずさわる人々は、間違いなく、作品を作りだす過程で、ある瞬間、精神が高揚しエクスタシー状態に陥った経験は少なからずあるはずだ。一瞬、神がかったものに囚われ、精神が制御不能に陥いる。トランス状態に身を置き、形骸化した自らの肉体にある種の「狂気」が降臨し、臨在する。己の肉体が、無限の彼方からその生を操られるような不可解な動きが自身の意識下で生じる。

その意識下に迷走する魂が芸術家に憑依するとそれは、それで一人歩きし、その眼底のパレットにありったけの色をぶちまける。妖しい万華の蝶が舞う有様が超現実美しく、妖艶にしかも絢爛に光に向かって飛び立つ。そこに、それを冷たく見つめるもう一人の私がいる。

「狂気」が放たれ、芸術家という人間の依代に君臨することで奔放で野放図な精神が生まれる。此岸から彼岸へ、意識の世界から無意識の世界へと彷徨し、美のラビリンスに迷い込む。芸術家なら、そこで遭遇する「風景」に思わず息をのみ、精神の高揚感を覚えた瞬間があるだろう。箕面の自然にその「風景」との邂逅を求め、役小角の験力と対峙する。

小角は、深山幽谷に分け入り厳しい修行を行うことによつて超常的な力を獲得した。その超常的な力は「験力」と呼ばれ、修行において自らの精神と肉体を極限状態におき、ある種のトランス状態で獲得される、と考える。巫女やシャーマンが自らをトランス状態に落とし込むのに似ている。それは芸術家と異なり、激烈な精神や肉体が求められる。芸術家のそれは視覚によって誘発されるマインドコントロールに近い。小角は過酷な修行を通じて極限の精神状態で仏を感じている。

芸術家もまた小角と同じく霊を感知する直観的な力を持っている。箕面山の自然に創造の「場」を見出した美術家は、神仏と交感し、まだ見ぬ造形(かたち)を幻視し具現する術を探る。「美」を感受するのも仏を感じ得るのも、神がかったものと交感できるのも、「選民」だけなのだ。いま、造形(かたち)は、霊山箕面に顕れようとしている。

4.2「場」としての明治の森箕面国定公園

箕面は、大阪府の北摂の山々の連なる一角にある。1400年も前から山伏の霊場(西江寺、瀧安寺など)として知られている。また観光地としても長い歴史があるにもかかわらず、自然が保存されている稀な地である。

大阪の北の中心地梅田から30分余りで、滝と溪流と森に遭遇できる。瞬時に都会の喧騒を忘れさせる、全国でも数少ない景勝地である。阪急箕面駅から滝までわずか3kmの道のりだ。滝道に差し掛かるや、森林の香りと溪流の水音とともに涼風が頬を撫でる。森林からはフィトンチッドが、

滝や溪流からはマイナスイオンが放たれている。滝道は私たちの心身をリフレッシュさせ、精神を安定させてくれる。春は緑が目の疲れを癒し、秋はもみじの紅葉が目を楽しませてくれる。五感にやさしい箕面の自然は私たちに恩恵をもたらしてくれるのだ。

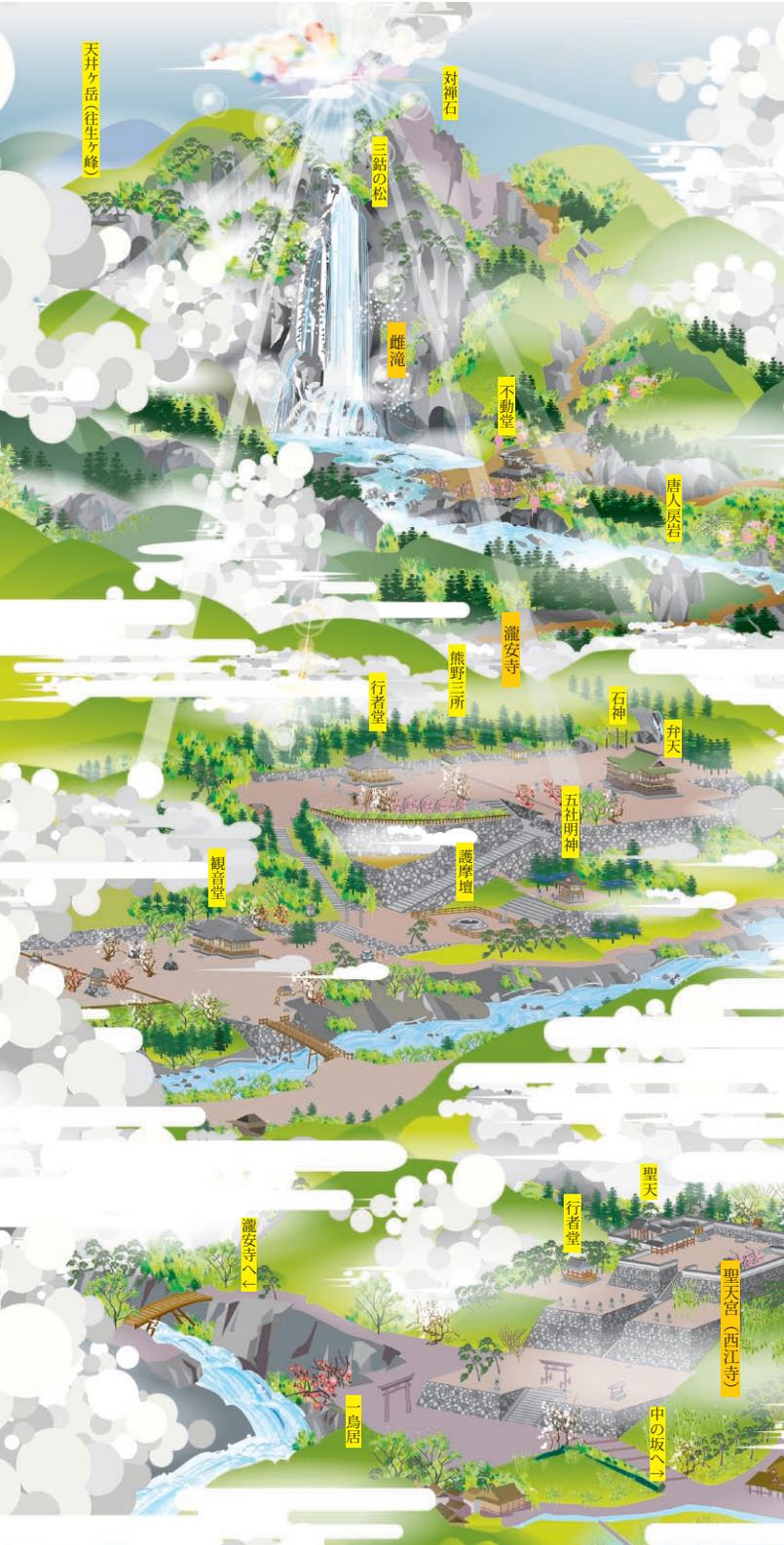
箕面の自然には、人間と長い間共生してきた温かきがある。人と共に創り上げてきた歴史や文化がある。もはや箕面は原生的自然ではない。滝道には約1400年もの間語られてきた物語がある。それは、650年(白雉元年)に役小角が箕面を訪れてから始まる。小角の足跡そのものが今日の箕面の歴史や文化そのものである。瀧安寺や西江寺を開基し、日本独自の山岳宗教、修験道確立し、箕面山を山岳修験道の根本道場とした功績は大きい。

この自然豊かな歴史ある箕面山を「場」として箕面の森アートウォーク2020をこの秋に開催する。

箕面山はよく知られた観光地だが、国定公園であるがゆえに公園の保護または適正な利用の観点から作品展示に多くの制約がある。原則として、公園内での展示は禁止。施設やその敷地内での展示は認められている。作品の展示およびパフォーマンスのための「場」は予め用意されていないので、アーティスト自らが店主や管理者にプレゼンテーションを行い、会場獲得に努めなければならない。そのため実行委員の案内のもとツアーは予定されている。このイベントへの参加アーティストは多くの観客に恵まれているが、反面、多くの制約の下、作品を制作しなければならない。そのためアーティストはより高い力量とより完成度の高い作品が求められる。

本展は、純粋にアーティスト個人の表現活動に資するために「場」を提供し、創作活動に寄与できるイベントを目指している。当初から「場」を考慮する、サイトスペシフィックアートを標榜している。サイトスペシフィックアートは、その地域の文化的、歴史的、地理的、地勢的要素など場所の特性を生かした表現形態である。アーティスト自身が「場」に身を置きこの時この場でしか存在しえないミニマルな動因によつてこそ「場」をより顕在化し、表現を誘発することができる。したがって、昨今の「地域再生」、「町おこし」を目的としたアートイベントとは一線を画している。箕面の森アートウォークは、アーティストが自主的に真摯に自己に向き合い表現する場である。その結果として地域活性化に貢献することになると考える。

観客動員数や地域活性化の成否、観客の評価におもねることなく自律的にこの箕面の「場」に内在する「美」を作品に十分に昇華してほしい。鑑賞者は、アーティストによる「美」の探究の痕跡を見出し、イベントのテーマである「美神おわす霊山箕面に顕わる造形(かたち)」を再認識できることだろう。その意味でも、アーティストがいかに「美の再発見」を成しえたのかを語る事ができるアートイベントでありたい。



「灌安寺を中心とした宗教世界としての箕面絵図」

箕面大滝と灌安寺、聖天宮（西江寺）
 CG制作 橋本修一（箕面の森アートウォーク 2020 アートディレクター）
 「攝津名所圖會」秋里籬島著
 寛政8年（1796）・同10年（1798）刊をもとに制作

箕面の森アートウォーク 2020

—私見・サイトスペシフィックアートの制作に臨んで、
 美術家として知っておきたい箕面の歴史と文化—

2020年2月20日 初版第1刷発行

著者 中谷徹

発行者 箕面の森アートウォーク実行委員会

発行所 コンテンポラリーギャラリー Zone

〒563-0043 大阪府箕面市桜井 2-10-5

Phone 080-3106-3177

装丁 橋本修一（CATBOX-X）

本文デザイン・DTP 橋本修一（CATBOX-X）

イラスト・写真 橋本修一（CATBOX-X）

企画協力 中谷雅代（コンテンポラリーギャラリー Zone）

箕面の森の時空を飛翔する美術家に捧ぐ

箕面川の悠久の流れに時の流れを重ね遊行する

1400年の時空間を飛翔し

呪術師役小角孔雀明王陀羅尼の念誦（ねんじゅ）を耳にする

溪流の流れも絶えず誦して止まない

轟轟とそして時にさらさらとさらさらと

あやしきまでの行者の験力が弁財天を大聖歓喜天を召喚する

古代の森の息吹と創造の神秘が蘇り

今を生きる美の強者どもを遠く遙かに憑依する

箕面の森にまだ見ぬ風景が顕れる時

天界の弁財天の琵琶の音（ね）が余韻嫋々と霊山箕面に響く

天を裂く大滝の落水は岩をも打ち砕き煙る

1400年の悠久の流れに遊び

強者どもは紺碧の天上を駆ける白竜の煌めきに眩惑す

彩雲たなびく龍樹の竜宮へのいざないに波瀾絢爛の夢うつつ

流水は白泡飛沫をともなって轟音と共に流れ落ちる

森が若草色に萌えるとき森に生命の息吹を吹き込む

森が緋色に変貌するとき強者どもが美の神に

瑞雲のごとき光り輝く供物を捧ぐ

光明の中にまだ見ぬ造形（かたち）が顕れる時

往生ヶ峰に読経が響き役小角の霊威に震撼する

コンテンポラリーアートギャラリー Zone

アートディレクター 中谷徹



箕面の森アートウォーク

MINOH
no MORI
ARTWALK
2020

箕面の森アートウォーク 2020 開催について

2017年の台風21号、さらに2018年関西を直撃した台風21号の影響で、灌安寺をはじめ箕面滝道は甚大な被害を受けました。2年に一度開催してきた「箕面の森アートウォーク」は、2019年の開催を断念し、「箕面の森アートウォーク 2017」の作品集の制作と、コンテンポラリーアートギャラリー Zoneでの「弁財天」展の企画をしました。その間、多くの人々やアーティスト、関係者からの励ましの言葉や開催を求める声があり、今年秋、「箕面の森アートウォーク 2020」を開催する運びとなりました。

これまで「箕面の森」の歴史や文化など、場所の特性を生かしたサイトスペシフィックな表現を求めてきました。今回は、実際に足を運び箕面に関わる多くの資料を探し出し、さらに箕面を研究する考古学の専門家を訪ね話を聞き取るなど、出来る限りの情報を集めてきました。箕面を深く知る、それは発見と驚きの連続でもありました。私たちは歴史書にはほとんど出てこない、日本のもう一つの歴史、修験道と言う山岳宗教の祖とされる「役小角（えんのおづぬ）」と言う一人の人物に行き当たりました。役小角は弁財天を祀る灌安寺と、歓喜天を祀る西江寺を開基したと言われています。「箕面の森アートウォーク 2020」では、アーティストたちが、この神々に感応し、見出した箕面の森に潜む造形（かたち）を顕在化します。「場」としての箕面山に眠る記憶や霊力とアーティストが共鳴する、そんな「箕面の森アートウォーク 2020」を開催いたします。

★箕面の森アートウォーク 2020 開催に向けて
 協賛頂ける方を募っています。

コンテンポラリーアートギャラリー  Zone

2008年12月、箕面市の桜井市場内に現代アートの企画ギャラリーとしてオープン。以来、展覧会やアートイベント（箕面の森アートウォークなど）を企画・プロデュースしている。2019年には、Zoneの隣にトライアングルギャラリー（レンタルギャラリー）をオープンした。サンディエゴ（アメリカ、カリフォルニア州）にも活動の拠点をもち、日米のアートの交流に貢献している。

代表：中谷徹、中谷雅代

〒562-0043 箕面市桜井 2-10-5 <阪急桜井市場内>

TEL / Phone 080-3106-3177

HP / <http://www.art-gallery-zone.com/>

Facebook / <https://www.facebook.com/ContemporaryArtGalleryZone/>